

東京
会場

樺太アイヌ語と伝承者

[1] 8月7日(火) 15:30~17:00

[2] 8月8日(水) 15:30~17:00

講師
横浜国立大学教授
村崎 恭子

1

'irankrahtee. ku'ani neyke murasaki kiyoko kunee.
イランカラハテー クアニ ネイケ ムラサキ キョウコ クネー

今わたくしは、樺太アイヌ語で「こんにちは、わたしは村崎恭子です」とご挨拶をして自己紹介をしました。これが、これからみなさんにちょっと勉強していただきたい言葉です。この樺太アイヌ語というのが、実はわたくしの大学時代からの研究テーマでした。今から考えますと、1960年の大学生の時からこれを勉強してきました。当時そんなにたくさんではないんですが、樺太から戦後引き揚げていらした樺太アイヌの方達から習いました。でもこの言葉は、ほんとうに悲しい事なんですが、最後の話し手と思われる方が1994年に亡くなりまして、それで今は話す人が一人もいないという状況でございます。

それで、今日と明日のわたくしに与えられた時間の中で、言葉の命とは何か、もしその最後の話し手が絶えたときにその言語は死んだと言えるだろうか、一つの言語が無くなるという事はどういうことなのか、また、言語が生き続けるということはどういうことなのかを皆さんに考えていただきたいのです。樺太アイヌ語という言語は、この日本列島の北の方の樺太の南半分に、かつて、日本語を話すわたくしたち和人達が住み着く前からこの言語を使ってずっと住んできた先住民族の言葉です。ですから、その言葉をこのような状態にしてしまったという事実を、皆さんと一緒に辿っていきたいと思います。

まず、わたくしがこの樺太アイヌ語を、どういうふうにして教わってきたかをその歴史を辿りながらお話しします。それから、わたくしが樺太アイヌ語を教わった過程でいろいろ録音したりなんかして整理した材料を使って、皆さんに紹介していききたいと思います。

わたくしがこの言葉を最初に習ったのは1960年です。それはわたくしが大学生の3年生のときでした。わたくしの専門は言語学で、東大の文学部の言語学科というところに進学しました。その前にモンゴル語を勉強したた

のですから、モンゴル語を勉強したいと思って東大の言語学科に入りました。ところが、その時に、恩師である服部四郎先生が、「今国交がないから直接モンゴル人から習う事が出来ない状態だから、モンゴル語をやるよりも、アイヌ語をやりなさい。アイヌ語はもう話し手がどんどんいなくなって、アイヌ語には文字が無いから、古老たちがお元気なうちに少しでも調べないと大変なことになる」と言って、勧めてくださいました。それが、アイヌ語を勉強する切っ掛けとなりました。

アイヌ語と申しましても、ご存知のように文字がありません。そして、文字が無いから話し手が亡くなってしまえば永久に分からなくなる、という言語です。しかも悲しい歴史がありまして、日本がものすごい同化政策を取ったために、とにかくアイヌの人たちは自分達の言葉を奪われてしまったのです。そして、日本語を話す大和民族がどこからきたか知らないけども、やってくる以前から、日本列島の、少なくとも本州は福島以北の東北地方、北海道全域、サハリンは南半分、それから千島列島は根室からカムチャツカ半島まではアイヌ語を話す民族が住んでいたという事は、その地名から分かります。茵舞（ハボマイ）、色丹（シコタン）などは、全部アイヌ語で解けます。だから、わたくしは言語学者ですから、民族の定義をそのアイデンティティとして言語というものをその証拠にいたしますと、アイヌ語を話す民族、つまりアイヌ民族が、それらの地域にかつては住んでいたという事は明らかです。そして、そういうふうに広範囲にわたって北海道を中心にアイヌ語を話す民族が住んでいたわけですが、段々と日本語の同化政策に圧迫されて、言葉を奪われてしまって、話し手が少なくなってしまっているという状況です。

でも、1960年に、わたくしがアイヌ語を勉強した時には、それでもまだ話し手は何人もご健在でした。それから、アイヌ語にも方言がありまして、大きな方言としては北海道方言が一番大きいものです。北海道方言の中にも南部方言と東部方言、それから北部方言という3つに分

かれます。それから樺太方言、千島方言というふうに3つに大きく分かれます。わたくしが1960年に始めた時には、千島方言は明治の時代にすでに話し手が絶えたという事がもう証明されているということでした。それで、服部先生のお勧めで、あなたはアイヌ語の中でもマイノリティの樺太方言をやりなさいといわれて、樺太方言を研究することにいたしました。

それで、このプリントに書いたのが、わたくしのアイヌ語の先生たちです。この方達がわたくしに1960年以来ずっとアイヌ語を教えてくださいました方達です。

藤山ハルさん(1900—1974)と太田ユクさん(1894—1980)

1960年にはじめた時には、本当に幸いな事に、樺太から戦後引き揚げて、常呂(トコロ)というところへ移住された樺太アイヌの家族が、10家族ぐらい住んでらっしゃいました。網走から車で40分ぐらい乗ったところですが、今はカーリングと帆立で有名なところです。オホーツク海の沿岸ですから流水なんかきて、すごくサハリンに気候が似てるんですね。そして、そこには、一人の素晴らしいおばあさんがいました。藤山ハルさんという方は1900年生まれで、わたくしが1960年にそこに行ったわけですから、そのときは60歳でした。でもその時にすでにもう古老として認められておりました。わたくしが今そのころの藤山ハルさんよりかずっと年上になっているのに、おばあさん、おばあさんとみんなが呼んでいたんですね。おばあさんというのは'ahci(アハチ)といいます。藤山アハチはシャーマンです。シャーマンというのは、神様が時々乗り移って、トランス状態になるというトウスが出来る人です。後からお聞かせします。本当に何でも分かる素晴らしいおばあさんでした。まずこの方から、わたくしはアイヌ語を習いました。

それで、うれしいことに1960年代には、太田ユクさんという人もご健在でした。藤山ハルさんと同じ界隈に住んでいて、わたくしがアイヌ語を教えてもらいに行きますと、すぐ藤山ハルさんの話し相手として、太田ユクさんが寄ってきてくれました。この時代にはお年寄り同士ではアイヌ語が生きていたんです。ちょっと北海道の場合とは違うと思います。樺太はもっと素朴な形で残っており、絶対に使わないとか、和人の学者に対してすごく反発するとか、そういういう事は一切ありませんでした。わたくしがまだ若い学生で、大きなテープレコーダーを持って行って、アイヌ語を教えてねといいますと、すぐにおばあさん達が集まってきてアイヌ語で会話をしてくれました。

藤山ハルさんはサハリンの西海岸のライチシカというところの出身の方です。それから太田ユクさんは、ライチシカより少し南に下がったところのマオカ、今のホルムスクという所の出身なんです、その方言を話すおばあさん達です。ですから、その時代は、少なくともこの2人は、わたくしが行くとすぐにアイヌ語で話してくれました。今から思うと、これはもう本当に貴重な時代だったと思います。そして、わたくしはそのころは学生

時代ですから毎年のように夏休みになると常呂に行きました。貧乏学生ですから6ヶ月ぐらい奨学金を貯めておいて常呂に行ってアイヌ語を教わるんですが、卒業して大学院に行って、それから結婚をして子供ができてしまったりなんかして、育児にすごく追われてなかなか思うようにいなくなりました。今から思うと、あの時もっと教わっておけばよかったと思うんですが、残念なことに藤山ハルさんは1974年に亡くなってしまいました。

そうしますと言葉というのは、そのコミュニティの中心的人物が亡くなってしまうと話相手がいなくなりますので、もう消えてしまうんですね。ですから、藤山ハルさんが亡くなった時には、わたくしはもう樺太方言は絶えてしまったと思って、本当に絶望しました。

長嵐イソさん(1882—1970)

それよりも前に長嵐イソさんという方がいらっしゃいました。わたくしが毎年、年に2回ぐらい常呂に行きますと、藤山ハルさんのところに樺太アイヌの人たちがみんな集まってきます。ハルさんの娘さんが金谷フサさんといって、この方は言葉はできないんですが、歌とか踊りとかトンコリとかという樺太アイヌの芸能がすごく出来る人でした。この方も早くに亡くなってしまったんですが、ハルさんが生きている間はわたくしが行くとみんなが来てくれて、いろんな情報をくれるんです。その中で、自分の母親はすごくよく知っているからと紹介してくれたことがありました。知床半島のウトロというところからもう少し先の方に行ったところにいらっしゃった長嵐イソさんも素晴らしい方でした。娘夫婦が朝漁に出た後、目が見えないのに一人で留守番をするような状況に長嵐イソさんはいらして、わたくしが行きますと、やっぱりとっても喜んでくれて、言葉をどんどん教えてくれました。この方は、タライカ方言を話していました。これはとても特殊な方言で、東海岸の北部の方言です。

この3人の方からわたくしは、藤山ハルさんが1974年に亡くなるまで、教わる事が出来ました。その時に、収録した会話の録音がございますので、これを是非聞いていただきたいと思います。

(テープを流す)

藤山ハルさんと太田ユクさんの会話という資料がありますね。1960年の最初の年は夏と秋に2回行ったんですが、2回目に行ったとき録音した会話です。右側に日本語訳が書いてあります。これは本当にまだ会話としてアイヌ語が生きていた時代の録音です。これより2年あとぐらいまでは、こういう会話があります。

だけれども、この時にはこのお二人しか話手がいなくて太田さんと藤山さんの会話しか分からなかったんですが、あとから長嵐イソさんがすごくできるということが分かったもんですから、わたくしはこの二人を連れて、知床まで行ったんですよ。ジープみたいなものでしか入れ

ないところなので、その当時は網走までも汽車しかいけなし、自動車なんて全然無かったので、すごく大変でした。3人で会話をした時は話だけじゃなくて、歌とかトンコリの演奏だとか踊りとかも出来たのでやったんです。それで、これが切っ掛けになってNHKの伝統音楽の取材が出来ました。伝統音楽に入っている、谷本一之先生がなさった樺太アイヌの収録は、この時にしたんです。わたくしがあの時、知床半島の長嶺さんのところに行ってやらなかったら、樺太アイヌのこれらの資料は、永久に入手できなかったと思います。

そして、わたくしはその文法を調べて修士論文にしたいんですが、ハルさんは文法のことでもなんでも、わからないことはないくらいでした。口承文芸はもちろん、ウチャシクマ'ucaskumaという昔話もご存知でした。今から思うとトゥイタハ tuytah とウチャシクマ'ucaskumaは違うんですが、いわゆる口語、散文で語られるお話もたくさん出来ました。

そして、不完全ですけども少し資料を集めたのですが、私の方もなかなか忙しくなって御無沙汰していたとき、娘のフサさんからハルさんが入院なさったという知らせを受け、なかなか行けないでいるうちに、結局ハルさんが亡くなってしまいました。

そのあと、太田さんもすぐ常呂から離れて別のところに行ってしまう、行方不明になっていましたが、あとで風の便りに1980年に亡くなったと聞きました。また長嶺イソさんは、わたくしがお会いした時にもう80歳を超えたおばあさんでしたから、ハルさんよりずっと前に亡くなったと思います。それでわたくしは、もうこの方言は絶えたというふうに思っていたわけです。本当にどうしたらいいか分からなくて、ずっと途方に暮れていました。

ところで、樺太から引き揚げてきたアイヌの方たちというのは、ある意味では二重に差別されているわけです。いくら迫害を受けても、ちゃんと生まれ故郷がある北海道アイヌの人とも違うのです。戦後サハリンが日本の植民地時代からロシア領になった時点で、樺太アイヌの人たちは日本人として自分の生まれ故郷を捨てて、日本・北海道に引き揚げて行くか、ロシア人としてサハリンに残るかという選択を迫られました。樺太アイヌの人たちは、ロシア人のことを樺太アイヌ語でヌチャといひます。これはRussia, ロシアから来たことばで、ヌチャ、ヌチャウタ（ロシア人たち）って言うんですが、ロシア人は怖いものだというような嫌悪感があったようです。それに、ちょっと単語ぐらいは知ってる人もいますが、ロシア語なんか全然分からない。一方、日本の同化はすごく進んでいます。先ほどのテープでお分かりでしょうけれども、このおばあさん達はもう日本語とアイヌ語の完全なバイリンガルです。完全なバイリンガルというのは、無意識のうちに二つの言葉をスイッチするわけです。だから、わたくしが日本語でちょっと何かさしはさむと日本語になっちゃう。それで今度は、「あ、ほら、日本語じゃない。アイヌ語で言ってみよ」ってわたくしがアイヌ語で言うとアイヌ語になるというふうなんです。注意しないと日本語になっちゃう。日本文化にもう慣れ親しま

されてしまっている。日本化が進んでいるという状況でしたので、当然のことながら樺太のアイヌの人たちは、日本に帰ることを選択したわけですね。

それで、わたくしの推定によりますと、樺太アイヌの人たちが一番民族として人口が多かった時代は2000人ぐらいだったと思います。そして、そのうち1200人ぐらいが引き揚げてきたんだと思います。函館に上陸したとみんな言っていますが、戦後引き揚げてきて、一部はワッカサクナイというところにたくさん住みついて、それから、2番目に多く住みついたところが常呂です。みんなやっぱりオホーツク海沿岸の、樺太と非常に気候風土の似ているところに住み着いたんですね。それから、何人かは日高の方にも住んだ方たちがいらっしやいます。

さて、話をもどして、ハルさんが亡くなって、わたしは樺太アイヌ語が絶えてしまったことを悔やんで、自分の不甲斐なさを嘆くばかりで、もうどうすることもできない状態でした。そんな時、わたくし自身は大学院をでまして、アイヌ語ではなかなか就職できない事は分かっていたので、外国人に対する日本語教育というのをわたくしの仕事にしまして、就職をいたしました。東京外国語大学の附属日本語学校というところで日本語をずっと教えていたんです。そうしたところが、北海道大学に新しく留学生に対する日本語教育のセクションが出来るといので、その日本語教育の方の仕事でわたくしにお誘いがあり、1983年に北大の方に移りました。その時はアイヌ語ということではなく、日本語教育の仕事で来ました。

そしたら北大に移った直後に、ある奇跡が起こったんです。それは、これからビデオをお見せいたしますが、それはどういうことかと言いますと、プロニスワフ・ピウスツキというポーランド人に関わることです。この人は、ポーランド共和国の初代大統領、ユーゼフ・ピウスツキのお兄さんにあたる人で、ご存知だと思いますけれどもこの二人の兄弟が当時のロシア皇帝の暗殺を企てて、それが事前に発覚し、二人ともサハリンに流刑に遭ったわけです。プロニスワフは貴族の出身で、もともと人類学者だったのです。10年の刑をサハリンの北の方のアレクサンドルフスクというところで終えました。その辺は北緯50度線で、本当にうまく引いたと思うぐらい南半分と北半分は植生まで違います。アイヌが住んでいたのは南半分です。それは地名で分かり、やっぱり南半分にアイヌ語の地名が集中しています。北の方はアイヌ語では解けない地名が大部分で、ニヴフであるとかウィルタであるとか、そういうほかのアイヌ以外の民族が住んでいたと思われます。そして、ピウスツキは最初北の方のアレクサンドルフスクで刑を終えて、'ギリヤーク=ニヴフの研究をしたんですね。そして、だんだん彼はアイヌに惹かれてきてアイヌの研究を始めます。それで、1903年から1905年までの間に、サハリンで蠟管レコードに録音したのです。その蠟管レコードがポーランドで発見されるという事件が1983年、わたくしが北大に赴任した時に、ちょうど起こって、そのプロジェクトが始まったんですね。それで、わたくしはたまたま樺太アイヌ語を専門に

今まで勉強していたので、そのメンバーになって、一緒にその研究に携わることが出来ました。

浅井タケさん(1902-1994)

そのお陰で素晴らしい話し手、浅井タケさんに巡り会ったのです。藤山ハルさんが亡くなってから10年のブランクのあとに、わたくしはこの浅井タケさんという方にめぐり会うことが出来ました。それが84年でしたから、それから浅井タケさんが94年に亡くなるまでの10年間というものは、わたくしにとっては本当に貴重な、大切な時間でした。この10年間に随分いろいろな収録もでき、多くのことを教わる事が出来ました。

そのいきさつをちょっとビデオで見ていただきます。そして、明日はこの浅井タケさんから教わった言葉、それからそのハルさん達の言葉をまとめてアイヌ語の教本を作りましたので、これを使って皆さんと一緒にちょっと挨拶の言葉ぐらいい練習して話せるようにしていきたいと思います。

(ビデオ上映 NHK特集「沈黙の80年～樺太アイヌ蠟管秘話」1984)

ちょっと、時間を超過してしまいましたが、今日のわたしの話は以上です。

これで最後の話し手が亡くなってしまったんですが、これをこのままにしていいいんでしょうか。なんとかこれを少しでも習いたいと思う人には伝えたいと思っています。大学でも「アイヌと言語と文化」という講義を一般教養科目の時間にやってるんですが、学生たちはみんなたくさん関心を持って聞いてくれて、片言は言えるようになっています。それでここでも皆さんに、少しでもこの言語に触れていただきたくて、習って下さいますようお願いいたします。皆さん、わたくしの後について言って下さい。いいですか。必ず明日もこれで始めたいと思います。

挨拶の言葉。'irankarahtee イランカラハテ。はい、どうぞ。'irankarahtee イランカラハテ、'irankarahtee イランカラハテ。

今度は「さようなら」。帰るときには、複数と単数と有りますので、わたくしが大勢のみなさんに対して「さよなら」と言うのは、pirikano payeyan. ピリカノパイェヤーン と言います。「みんな元気で行きなさい」という意味です。yan は動詞の2人称複数語尾です。

そうしたら皆さんはわたしに、pirikano 'an. ピリカノアーン と言って下さい。わたしは一人でここに残るわけですから、「元気でいなさい」というふうに、単数形でいえばいいのです。

では、はい、どうぞ。

pirikano payeyan ピリカノパイェヤーン。

pirikano 'an ピリカノアーン。

'iyayraikire イヤイライキレ (ありがとう)。

それじゃ、今日はこれで終わります。また明日。

'irankarahtee. tanto 'ampene sihseeseh. nuuman
イランカラハテ タント アンペネ シヒセエセヘ ノーマン
maskin hannehka sihseeseekihi neewa kayki tanto
マシキン ハンネヘカ シヒセエセキヒ ネーワ カイキ タント
ne'ampe sih seeseh.
ネアンペ シヒ セーセヘ

今アイヌ語でご挨拶をしました。「こんにちは。今日はとても暑いですね。昨日はそんなに暑くなかったのに今日は暑いですね」と言ったんです。

これから15分間アイヌ語の勉強をします。「樺太アイヌ語入門会話編」の第2課を勉強しましょう。それから、そのあと15分は、1988年にわたくしがNHKのテレビコラムというところで話したときの、浅井タケさんの口承文芸のとてもいい映像がありますのでそれをご紹介します。それからあとの30分は、樺太アイヌの口承文芸を皆さんにお聞かせいたします。そのテキストはコピーして差し上げています。残りの30分は皆様からのご質問の時間に充てたいと思います。

それでは、アイヌ語を勉強しましょう。ke'anah 'aynu 'itah 'ani 'ukoytakan. ケアナハ アイヌイタハ アニ ウコイタカン (じゃあ、みんなアイヌ語で話しましょう。)

ご承知のようにアイヌ語には文字がありませんから、文字を見て読むという事は絶対にしないで下さい。いいですか。耳から聞いて、とにかく真似する。子供が言葉を習うのと同じような調子でやって下さい。まず、聞く事が大切ですね。と言っても、私は本物のネイティブスピーカーではありません。なるだけ、おばあさんに習ったようには真似しますが、なにぶんsiisam mahtekuh シーサム マハテク (和人の女) なので仕方ありません。

樺太方言は北海道方言とだいぶ違います。調子がまるっきり違うと思った方がいいと思います。その大きな特長は、アクセントの対立がありません。北海道はアクセントの対立が一応あるんですが、樺太方言はアクセントの対立がない。その代わり、長い母音と短い母音があります。長い母音は当然のことながら高く発音します。例えば、北海道で糸というのをka 「カ」と言いますよね。それを樺太方言ではkaa 「カー」というふうに言います。だから、それがちょっと違う。あとはイントネーションです。疑問文が下がるんです。それから、叙述文 affirmative アフーマティブが上がるんです。これがすごく特徴的で、わたくしは大好きなんですけれども。それだけちょっと注意してください。

昨日ご紹介したビデオで、わたくしははじめて浅井タケさんに会った時に下手くそなアイヌ語で話しかけていましたが、それを元にしてこの会話を作りました。右側に日本語訳が書いてありますので、それを見ながらわたくしが真似をしますので聞いてください。わたくしとおばあさんの会話です。

'irannkarahtee. イランカラハテ (みんなが復唱する)。いいえ、聞いてください。まず、聞くんです。子供

がその言葉を習う時には分かんないから聞くんですよ。一生懸命聞いている。だけど突如として話し出すんですよ。だから聞くという事がまず第一です。そして、その次にわたくしの後について繰り返してください。そうすると、段々と分かってきます。ではまず、日本語訳を見ながらとにかく聞いてください。

第2課 IRANKARAhte おはようございます

イランカラハテ

会話1

- A: 'irankarahte.
イランカラハテ。
- B: 'irankarahte.
イランカラハテ。
- A: 'ahci, Tahkonanna 'isanka?
アハチ、タハコナンナ イサンカ?
- B: siina'an. 'anoka neyke Tahkonanna 'an=nee.
シーナアン。アノカ ネイケ タハコナンナ アンネー。
- A: tara 'aynu naata?
タラ アイヌ ナータ?
- B: tara 'aynu neyke Atuy nispā (nee).
タラ アイヌ ネイケ アトゥイ ニシパ (ネー)。
- A: tara mahtekuh neyke Sinohcaki nee hee?
タラ マハテクフ ネイケ シノホチャキ ネー ヘー?
- B: isam. Sinohcaki ka hannehka. tara mahtekuh neyke
イサム シノホチャキ カ ハンネヘカ タラ マハテクフ ネイケ
Ninkaari (nee). 'e'ani naata?
ニンカーリ (ネー)。エアニ ナータ?
- A: ku'ani neyke Kiyoko (ku=nee).
クアニ ネイケ キヨコ (クネー)。
ku'ani neyke siisam mahtekuh ku=nee.
クアニ ネイケ シーサム マハテクフ クネー。

<日本語訳>

- A: おはよう。(こんにちは。)
- B: おはよう。(こんにちは。)
- A: ばば、タハコナンナじゃない?
- B: そうだ。私はタハコナンナだよ。
- A: あの人だれ?
- B: あ的人是アトゥイニシパ (だ)。
- A: あの人シノッチャキさんか?
- B: いや。あ的人是シノッチャキさんじゃないよ。ニンカーリさん (だよ)。お前はだれ?
- A: 私はキョウコよ。私は和人の女だよ。

語句

'irankarahte<おはよう、こんにちは、こんばんは>
'isanka? <じゃないか> siina'an<はい>
'anoka<わたしたち> neyke<〜は>
'an=nee<わたし(老)は〜だ> tara 'aynu<あのひと>
naata<だれ> Atuy nispā<アトゥイニシパ>

mahtekuh<女性> ~ka hannehka (nee)<〜ではない>
'e'ani<おまえ> ku'ani<わたし>
ku=nee<わたしは〜だ>

これだけです。もう一度繰り返します。
(会話の聴解と復唱を繰り返す)

では、一つ一つの言葉を覚えていきましょう。

まず、'irannkarahte. イランカラハテこれは挨拶の言葉です。日本語の「おはよう、こんにちは、こんばんは」に当たります。これを私は、萱野さんのように「私の心に触れさせてください」とは分析できません。とにかく'irannkarahte. イランカラハテというのは最初に会った時の挨拶の言葉です。北海道では、これは随分かしまった挨拶の言葉みたいですが、樺太ではそんなことはありません。誰でもどこでもいつでも使っている言葉で、すごく便利な言葉です。これはこれ一語で、文になってしまいます。一緒に言いましょう。'irannkarahte. イランカラハテの -h が北海道では -p になるわけですね。これが樺太では -h になります。この -h というのは、知里真志保先生が -x という印で書いてらっしゃいます。これを、見て素直に発音するとドイツ語の achlaut みたいな喉音を想像しますが、実際の発音は全然そんなことはないのです。これはただのh「エッチ」です。hというのは息です。声が無くなったときにhになるのです。[aaa...]と言って、声を止めてそれを息にして下さい。[aaa...h]。それがhです。[iii...h] はい。[i]のあとのhは「シ」のような感じになります。[ih, ih] イシ。[ih, ih] [eh, eh] [oh, oh]、そうです。はい、'irannkarahte. イランカラハテ。

それからもう一つ。neeネーと言う言葉です。neeというのは、いわゆるbe動詞です。「〜である、〜だ、〜です」という意味を表す動詞です。それから、アイヌ語はご承知のように「私は〜だ」とか、「あなたは〜だ」とかという時、その主語がこの前に来るわけじゃなくて、主語が、人称接辞としてくっついてしまいます。樺太の人称接辞は北海道の人称接辞とちょっと同じですが、ちょっと違います。1人称の単数は ku- クを付けなければいい。2人称の単数は 'e- エを付けなければいい。何も付けなければ3人称の単数になります。

今度は複数の方です。1人称複数の「われわれが」というのは 'an- アンを付けなければいい。neeの場合は前にアンをつけます。neeというのは、他動詞の類の中に入ってますから 'an- アンが前につく。ところが自動詞の場合には -an アンが後ろにくっ付く。例えば「行く」の複数形動詞は paye パイエですが、これに「私たちが」の人称接辞 'an が付くときは後ろにくっ付いて、paye'an となります。この1人称の複数の接辞は、自動詞の場合には後ろにくっ付くが他動詞の場合には前にくっ付くというすごく面白い特徴を持っています。

それから、2人称の複数 'eci エチ。eci が nee の前について 'ecinee エチネーとなります。「あなたがたは〜だ」という意味です。

それから、樺太では、3人称の複数の場合には、-hci シチ

という語尾がつきます。これが北海道にはないところです。nee に-hci がつくと nehci ネシチ。つまり、nee という長い母音に-hciがつくと短くなって ñehci となるのです。*nee-hci では2モーラになって長すぎるから1モーラに短くなります。こういうようなちよつと癖がありますが、これは癖ですから覚えてしまえばなんでもないですね。

kunee クネーというのは「私は～だ」。「あなたは～だ」というのが 'enee エネーです。「あの人は～だ」というのは nee ネーだけを付ければいいということです。

それからもう一つ言葉を覚えて下さい。naata ナータ「だあれ?」。これだけ覚えて下さい。つまり、'irankara htee と nee と naata、それに人称接辞だけ覚えれば、すぐ出来るようになります。

じゃ、もうだいたい分かったと思います。わたくしのあとをついて言ってください。はい、'irankarahte イランカラハテ。読まないで下さいね。

'ahci アハチというのは「おばあさん」と呼びかけているんです。つぎの 'ahci, tahkonanna 'isanka? タハコナンナ イサンカというのは「タハコナンナじゃない?」ということ。例えば、「萱野先生じゃないの?」というのは、kayano nispa 'isanka? カヤノニシパ イサンカと言えばいいわけです。siina'an シーナアンというのは「その通りです」という事です。正しいですという事です。その否定は、'isam. イサムです。

'anoka neyke Tahkonanna 'an=nee.

これは「わたしはタハコナンナだよ」と言っているんです。これは不思議に思われると思うのですが、わたしというのは1人称単数にもかかわらず1人称の複数を使っているんです。これは年寄り言葉なんですよ。年寄りは自分の事を、日本語だって、「わしら」と言うじゃないですか。自分一人の事なのに。それと同じことです。年寄りは、1人称単数に複数形を使うんです。口承文芸の中では、1人称叙述というのがあります。「われはなにになにせり」というふうにありますよね。これは1人称といっても1人称複数で、'an アンという形ですよ。これと私は何か関係がありはしないかなと思っています。服部先生が、樺太方言の年寄り言葉について、老人層の特殊語という論文を書いていらっしゃいます。それで、タケさんは立派な poro 'ahaci ポロ アハチ おばあさんですから、自分の事を複数で言います。もちろん単数で言う場合もあります。とにかく、年寄りは1人称の単数であっても複数形を使う、ということにちょっと注意してください。

'anoka アノカ というのは「私ら」。neyke ネイケ というのは「は」です。日本語と同じです。

tara 'aynu naata?

これは「あの人はだあれ?」と言っています。

tara 'aynu neyke Atuy nispa nee.

「あのひとはアトゥイ ニンパだよ。」発音で日本語と一つだけ違うのがあります。日本語では「タ、チ、ツ、テ、ト」ですが、アイヌ語では、「タ、チ、トゥ、テ、ト」です。アイヌ語には「ツ」はありません。「トゥ」があります。'atuy アトゥイ。アトゥイというのは、「海」という意味です。nee ネーは省略しても構いま

せん。tara 'aynu neyke Atuy nispa. とはいいいんです。'aynu の反対は mahtekuh マハテフク。女は mahtekuh。'aynu は英語の man という意味です。それからアイヌ民族の民族名も意味します。

tara mahtekuh neyke Sinohcaki nee hee?

文の最後に hee ヘーとか hii ヒーをつけてイントネーションを下げれば、疑問文になります。日本語の「か?」に当たります。「あの女の人はシノッチャキさんですか?」と言ってるんですね。

'isam, Sinohcaki ka hannehka. tara mahtekuh neyke Ninkaari (nee).

「いいえ、シノッチャキではない。あの女はニンカーリーだよ。」ニンカーリーというのは耳飾という意味ですが、名前です。ニンカーリーさんというふうな名前を付けてるんですね。

'e'ani naata? ku'ani neyke Kiyoko (ku=nee). ku'ani neyke siisam mahtekuh ku=nee.

「お前はだれか?」「わたしはきょうこよ。わたしは和人の女だ」と言っているんですが、アイヌ語には「キョ」という拗音の発音がないから「キョウコ」は「キヨコ」となってしまいます。アイヌのおばあさんは、「キャ。キュ。キョ」はできない。「チャ。チュ。チョ」はあります。いわゆる拗音ができない。だから、わたしの名前を「キヨコ」というふうに言います。siisam シーサムは 'aynu アイヌ「アイヌの」に対して、「和人の」という意味です。それじゃ、この会話を、わたしの後についてもう一度繰り返して言って下さい。

(会話を繰り返す)

アイヌ語の練習はこれで終わります。

それじゃ次に、ちょっとビデオを見てください。これは1988年にNHKのテレビコラムという番組で放映されたものです。この中に、浅井タケさんの口承文芸の録画がありますから見て下さい。同じジャンルの tuytah トウタイハ(昔話)と 'oyna オイナ(神謡)のテキストをプリントしてお渡ししましたので、それを見ながら聞いて下さい。

(ビデオ上映)

浅井タケさんの語る口承文芸をご覧になっていかがでしたか。この録画が1988年ですから、今からもう13年前の話なんです。それからこれのあと、ご存知のように1997年にアイヌ文化振興法ができて、このアイヌ文化交流センターなどもできたわけです。しかし、アイヌ言語文化を取り巻く日本社会の状況は、この1988年と、わたくしは本質的にはまだまだ変わっていないというふうに思っているんですね。それで、もう話し手は絶えてしまった樺太方言ですが、一人でも多くの方が、実際に関心を持って、触れていただきたいと思います。触れて、ちょっと使ってみるとか、関心を持って接していただければ、それがだんだん大きな力になっていくのではないかという希望

をもっています。宜しく願いいたします。

そういうわけで、北海道アイヌの口承文芸についてはとても有名でいろいろ紹介されているけれども、樺太アイヌの口承文芸についてはあまり知られていません。今まで明らかにされてなかったわけです。ピウスツキの蝸管再生のお陰でわたしは浅井タケさんに会えて、それまで藤山ハルさんや常呂の方たちから断片的に教わっていたものが、はっきりと具体的に検証することができました。それで、樺太アイヌ口承文芸のジャンルを表にしてみましたので、今お配りした物をご覧ください。

まず、知里真志保先生に従って物語のものと歌謡のものを分けますと、物語の方で韻文で語られるもの、いわゆる節をつけて語られる物語が二つあります。ハウキとオイナです。このハウキというのか北海道の場合はアイヌユーカラです。それからオイナというのが、北海道の場合はカムイユーカラにあたるわけです。だから、日本語に訳しますと、英雄詞曲、神謡というふうになんか訳しております。つまり、樺太の場合は、アイヌユーカラがハウキというふうになんか称される。それから、いわゆるカムイユーカラがオイナというふうになんか称される。その語り口も内容も北海道の場合とかなり違います。今お聞きになってお分かりだろうと思います。オイナもカムイユーカラのようにリフレインが付くのは同じなんです。先程のホーリフナーというリフレイン。それから、必ずその主人公がヤイレスーポなんです。ヤイレスーポは男の主人公で、女の主人公はヘリモタンケです。それで、ヤイレスーポというのがビデオの中でも言っていたように、'arikirih' enciw 'arikirih kamuy. アリキリヒ エンチウ アリキリヒ カムイ。つまり、半人半神の神様です。半分神様で半分人間の神様ということなんです。どんな神様かは知らないんだけど、とにかく、半人半神の神様がその主人公になっていて、いろんなお話があります。オイナはそういうものです。

そして、注意すべき事はハウキは男が語るもので、女は絶対語らない。ところがオイナは女が語るんです。男も語っていいけれど、女が得意なジャンルです。だから浅井タケさんは絶対にハウキを語らないんです。真似事でいいからちょっとしてちょうだいと言ったら、真似事はしてくれましたが、これは、女は語るもんじゃないと言って強く断られました。そういうものです。

一方、散文の物語の方は、tuytah トゥイタハというのと、'ucaskuma ウチャシクマというのがあります。tuytah は、浅井さんがものすごく得意な分野でした。10年間にわたくしは54のお話を収録できて、去年やっとこれをまとめる事が出来ました。はじめて1983年にお会いして1994年に亡くなったんですが、最後の2年間はほとんど入院していましたから、ほとんど新しいトゥイタハは取材は出来ませんでした。厳密に言えば8年間の間に、本当に次から次へと出てきました。それをようやくまとめさせていただきました。アイヌ文化振興財団の助成金を頂いて、出版できました。これもアイヌ文化交流センターにありますので、是非いつでもお聞きになりたいときには聞いてください。

そのうちのAt. 36のお話なんですが、「いびきの話」というのを、ちょっとお聞かせします。最初に説明だけしてしまいます。トゥイタハというのは、非常に形式の整った散文で語られる昔話です。形式が整ったというのはどういうことかと言いますと、このテキスト「いびきの話」や先程のビデオに出てきた、「ボヌンカヨ」を聞いてお分かりの通り、主人公の名前が実在する人名ではなくて、架空の名前なんです。必ず男の主人公は、horokewpo ホロケウポというふうになっています。horokew ホロケウというのは狼ですよ。horokewpo ホロケウポは「狼っ子」ということです。それから女の主人公は、monimahpo モニマッポといいます。ホロケウポはだいたい3人兄弟が多いんですね。3人兄弟が上から、お化けにあたりなんかして、次々に冒険を繰り返して、それで、一番下の末っ子が一番勇気があってお化けを退治をするというようなパターンがあります。また、女も3人姉妹がよく出てきます。それから、'ahci アハチ(おばあさん)がでてきます。おばあさんが出てくるのに、どういうわけか知らないけれど、henke ヘンケ(おじいさん)はめったに出てこない。それで、アハチは時々 'oyasi オヤシ(お化け)なんです。お化けというのは人間の姿から獣の姿とかカラスに化けたりキツネに化けたりして、変身が出来る。それが仲介しているいろんなことをやるというパターンになっています。

それから、もう一つ、これは浅井さんのトゥイタハではじめて分かった事なんですが、必ず挿入歌が入っている。例えば、さっきのテレビでもありましたね。ni 'osuhtaa cipaakennee …という歌がありましたね。「木の下に子供を見つけたよー」とかなんとかというのを歌にしちゃう。それから、カラスが来たと言ったら karararaa kira'uu tohtee …とカラスの鳴き声をその歌にして、挿入歌が入っている。挿入歌はわたくしの学生の千葉大学の丹菊君が挿入歌を専門の研究テーマにすると言うから、わたしは挿入歌のところを日本語訳しないで、そのまま彼のために残してあります。この挿入歌が入っているということがトゥイタハの大きな特徴です。それから、ピウスツキのテキストにもトゥイタハが出てきましたが、これにもやっぱり挿入歌が認められますね。ですから、形式が非常に整っている散文の一つのジャンルがトゥイタハです。

それからウチャシクマというのは、その他もろもろの伝説であるとか、こういうようなことがあったとさとか、人のうわさ話とか、普通の形式にとらわれないお話がウチャシクマです。ところが、最初、藤山ハルさんからそのお話をわたくしが取材した時に話してくれたものの中にトゥイタハも入っていました。ですから、伝承者によってジャンルの扱い方というのは違うかもしれません。ダイジェスト版を勝手に作ったりなんかして語っていくからだと思います。浅井タケさんの場合は、ウチャシクマとは別にトゥイタハというのがきちっと区別されていて、54のトゥイタハにいろんなバラエティを聞くことができました。

以上が物語の口承文芸です。これ以外の歌謡の類を樺太方言ではユーカラと言います。ユーというところが長く発音されます。なにかユーカラやってよと言ったら、

歌を歌ってくれます。アイヌユーカラのことじゃありません。カムイユーカラのことでもありません。それはオイナとかハウキとかって別の名前があります。ユーカラというのは、歌うと言う事です。ユーカラにはいろんなユーカラがあって、これはピウスツキの蠟管に随分入ってたからよくわかるんです。yaykatekara ヤイカテカラ、これは女の歌です。恋の歌と今まで訳されていましたが、そうじゃなくて、女が歌う恋の歌なんです。女が歌う男に対する恨みも歌うのです。「女の歌」とわたくしは訳しました。これに対して、男の歌もあるんです。男が女に対する慕情を歌ったりとか、なんか気を引くような歌を歌ったりする、yaypunihaw ヤイプニハウというのがあります。これを「男の歌」とわたくしは訳しました。それから'ihunke イフンケ。これは「子守唄」です。それからhecirehaw ヘチレハウというのは「踊り歌」です。あとからお聞かせします。それから、cipohaw チポハウ「舟こぎ歌」があります。それから、sake sinohca サケシノホチャというのがあります。これは「酒の歌」というふうに訳しました。これは宴会の時に歌うということじゃなく、やっぱり酒礼の時に歌うものですね。ですから、宴会の時に酔っぱらって歌うというような歌ではありません。それからrekuhkara レクフカラというのは、歌の中に入るかどうか分かりませんが、喉鳴らしというものです。それからtusu トゥス。これはシャーマンのお祈りです。あとからちょっとだけお聞かせします。藤山ハルさんのトゥスが入ってますので。

では、古い録音ですが、藤山ハルさんの声をお聞き下さい。これは、藤山ハルさんの「小さな女の子」というお話で、ウチャシクマと称してるものです。浅井タケさんと同じ内容のお話が入ってたので、ちょっと聞いて下さい。maas pontara pii tara pittara pii これが挿入歌ですね。これはハルさんがウチャシクマとして語ってくれたんだけど、実はこれトゥイタハですね。

この次は、ちょっとtusu トゥスの声の一つだけです。本当はトゥスなんかは録音しちやいけないんですよ。わたくしは実際に、ハルさんに神様が乗り移る時に出くわしたことがあるんですが、うまく録音できず、テープにちゃんと入っていませんでした。これからお聞かせするのは40年ぐらい前のラジオの録音です。このアナウンサーが、これは「ドスと呼ばれる…」とすごいことを言っていました。これは多分、tu トゥという発音は日本語にないからでしょう。「ト」に半濁音を表す丸をつけた文字「ト°」を作っていますから、これを濁音と間違えて、「ド」と読んでしまったんですね。きっとアナウンサーがこんなの読めないから誤植だと思い、これを濁点だと思ってドスと読んでしまったんですよ。だから、わたしは学生たちにいつも、「知らなかった」では済まされないと云ってるんですよ。ちゃんと何でも知るべきですよ。アイヌの偉大な文芸とか文化というのは、日本人はみんな当然、知らなきゃいけないんです。教えなかった方に、もちろん責任があります。tusuを「ドス」と言って平気ているのは、やはり恥ずかしいことです。

それから、樺太アイヌの人は、北海道の人もそうです。踊りが好きでとにかく音があればすぐ踊りだします。それで、踊り歌、ヘチレハウをお聞き下さい。熊祭りの前夜祭に女達が6人ずつ輪になって踊るんだそうです。3晩ぐらいつづけるそうです。熊祭りの始まる前は女の出番で、熊祭りの当日は女は陰にかくれているんですね。めったに表には出てこない。この音楽、すごいでしょ。ポリフォニーというか、複雑なシンコペーションで4人ぐらいで歌っています。これがヘチレハウの一つです。こういう調子からもっと静かなのもたくさんあるし、ほんとに面白いですね。

これから、オイナのテキストを見ながらちょっとお聞かせしたいと思います。浅井タケさんはオイナも非常に得意なジャンルで、よくできるんですが、トゥイタハの方が散文で言葉が分かりやすいし、普通のいろんな単語が出てくるから、トゥイタハの方を先に起こしました。オイナの方も今一生懸命起こしていて、なんとかしてCDにしたいと思っています。これは、不完全なテキストです。ハイキン クス ハイキンというリフレインを付けて語られます。ヤイレスーボがやっぱり主人公ですね。

いま大急ぎで樺太アイヌの口承文芸をいろいろご紹介してきたんですが、ちょっとこちらを見て下さい。下手な樺太の地図を書きました。長嵐イソさんはタライカ方言で東海岸ですが、わたくしが教わった藤山ハルさん、浅井タケさん、それから太田ユクさんの3人の方達はみんな西海岸の方の方言です。一方、ピウスツキが調べたのはこのシラハマというところですから東海岸なんですよ。それから、蠟管に入っていた声はみんなこの東海岸の方言が多い。蠟管がきっかけになってピウスツキのテキストも出てきたんですよ。それをちょっと起こして出しましたが、そのことばも基本的には西海岸とあまり変わりません。だけれども、ところどころで-p, -t, -k が -h にならないで、そのまま-p, -t, -kが残っていたりとか、そういうことがあります。また、人称接辞の使い方がかなり違うということがありますが、基本的には違わないと思います。そして、口承文芸のジャンルも同じだと思っています。

それで、わたくしはこの方言を勉強してつくづく思うことがあります。アイヌ語と言ったら、カムイユーカラを真似して演じるとか、ウエペケレを真似して言うということ、みんなよくさるんだけれども、言語はその日常語としての構造が分かった上でじゃないと、口承文芸に出てくる言葉を理解するのは難しいんじゃないかと思うんですね。ですから、まず、その日常語の枠組みを、折りに触れてそれを理解して、その上でカムイユーカラだとか、いろいろな口承文芸を鑑賞なさると、より深いところがわかると、わたくしはつくづく感じております。

ですから、これからどういうふうにしたらアイヌの文化を理解して、その次世代に伝えて行く事ができるかということなんですが、たとえ流暢な話し手は絶えても、こういう音声資料はいろいろありますので、これを頼りにして、日常語を理解して勉強していくという事が大切なんじゃないかなと思っています。